

特別企画 2010年スリ身動向

「業界新聞スペシャリスト」

(株)みなと山口合同新聞社 「みなと新聞」 東京支社長 川崎龍宣氏
 (株)水産タイムズ社 「水産タイムズ」 編集部長 辻 雅司氏
 (有)ぼわそん通信 「かまぼこ通信」 編集長 小山一夫氏

に聞く!

みなと新聞

東京支社長 川崎龍宣氏



下げ止まるかBシーズン価格

この原稿が掲載される頃には、米国のベリング海の今年のスケソウBシーズンの操業は終わっていることと思う。手元にあるNMF S(ナショナル・マリーン・フィッシュリーズ・サービス)のまとめは9月5日現在で、同日現在のBシーズンすり身生産量は4万2017ト。このままのペースで最後までいけば、最終的な生産は前Bシーズンより35%前後少ない4万7000ト~4万8000トになると予想される。全体のスケソウ漁獲枠が昨年の100万トから今年は81万5000トに減り、当初からすり身の生産はダウンすると見られていた。しかし、最終的なすり身生産は枠の削減率(18.5%)を上回る減少となっている。ちなみにAシーズンのすり身生産は、3万7325トで前年Aシーズンに比べ27%ダウンした。Bシーズンはさらに、削減幅が広がったことになる。この減少は、既に知られているように加工の対象がすり身からフィレーやH&G(Headed&Gutted:頭と内臓を取ったもの)へシフトしているのが原因となっている。特に今年は、中国加工向けのH&Gとミンス(落し身)の増加が影響している。H&Gは2.5倍の3万5000トに、ミンスは8%余り増えたと見られる。フィレー生産はすり身同様に漁獲枠削減の影響で昨年実績を下回っている。Aシーズンは前年比1.3%ダウン。Bシーズンも約9%減少している。ただ、減少しているが、いずれも漁獲枠削減率よりその幅は少ない。

Bシーズンを振り返ると、6月10日から始まり序盤は1キロ前後の魚の比率も高く操業は好調に推移。しかし、その後漁場が北上するに従い小型魚の比率が増し、300~350mmサイズの魚群は、来年以降の漁獲枠の鍵を握る2006年生まれの卓越年級群だ。現地の生産にもかかわる日本の関係者によれば、資源的には豊富だという。ただ、型が小さく成長の遅れを指摘している。

来期、確実な米国の増枠

2010年、来年のスケソウの漁獲枠はどうなるのか?今年2月のプランでは、2006年の卓越年級群の加入で増枠を予定している。OFL(オーバーフィッシングレベル)を143万ト(09年97万7000ト)とし、ABC(生物学的漁獲許容量)を123万ト(同81万5000ト)、TAC(漁獲可能量)を123万ト(同81万5000ト)と想定している。今後、科学委員会の勧告を経て、最終的には12月の北太平洋漁業管理委員会が決まる。現在のところなんとも言えないが、米国からは、Bシーズンを終えた現在、TACの100万ト回復は難しいとの見方がさかんに流れてきている。仮に資源状況が良好と判断され、123万トのTACが設定された場合は、今年に比べて50%増

の漁獲枠となる。100万トでも23%増加する。今後もフィレーやH&Gの生産は増えると思われるため、枠の増加に合わせて単純にすり身生産が増えることはないが、今年以上の生産は間違いなく期待できる。

アジア産供給?国内需要は?

昨年夏から秋をピークにすり身の価格は下がり始めた。米国のすり身価格のピークは、昨年のBシーズン。その成約価格は、SA670円、FA630円、A(AA)580円、KA500円、RA350円。今年Aシーズンの中心的価格は、SA570円、FA530円、A(AA)430円、KA350円、RA220円。ただ、メーカーによって、値幅があると言われている。特にAクラス以下はメーカーによって開きがあるようだ。Bシーズンの価格は、水面下で交渉中と言われている。東南アジアなど米国以外からの輸入も減ったままで、国内在庫も徐々に減少。それでも国内のねり製品メーカーは、静観している。急激に進む円高でさらに値下げを期待する向きもある。東南アジア産のすり身は底を脱して上げてきていると言われるが、このBシーズンは下げ止まるかどうか焦点になりそうだ。

来年のすり身価格はどうなるか。不確定要素が多い。第1のポイントは、落ち込んでいる東南アジア産すり身がどの程度回復するか。第2のポイントは、米国の漁獲枠がどの程度増えるか。そして第3は、国内のねり製品の生産規模(すり身需要)がどの程度になっているか。この3つで上げ下げが決まる、と見ている。

水産タイムズ

編集部長 辻雅司氏

米国Bシーズンほぼ終漁、スリ身は日本向け2万トに

米国Bシーズンのスケソウダラ漁獲はDAP船と母船が終漁し、陸上工場での漁獲枠をわずかに残すところとなった。この結果、米国での今年のスリ身はAシーズンが3万ト強、Bシーズンが4万ト強の合わせて8万ト(昨年11万ト)となった。このうち、日本向けは半数の4万トと見られ、Bシーズンの日本へは2万トで、うち、SA級、FA級の上級品は1割程度と極めて少ない。今後10月から12月に向けて年末年始おせち商品の需要期となることから、上級スリ身がややタイト化することも予想される。しかしながら価格的には、これら上級品でAシーズンと比べ5~10%程度値下げで価格交渉が行われている。

上級スリ身は極端に少ない

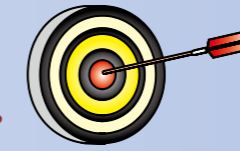
今年の米国スケソウダラの漁獲枠は昨年の100万トから81万5000トに約2割減少した操業となった。このうち、Bシーズンは6月10日からスタートし、当初、魚体が大きく漁獲ペースの順調だったことから8月中には終漁するのではないかと見られていた。しかし、7月の後半から魚体が小型化し、さらに漁獲ペースが鈍ったことから、9月までの操業にずれ込んだ。Bシーズンに

今回のWillow「特別スリ身通」として知られる各紙のスペシャリスト3名の方々に、気動向について、共通の3つの質問内容で伺ってみました。価格予想ようですが、是非、参

【共通質問内容】

- ①現状について;アメリカのスリ身動向は?
- ②来年のスリ身動向の予想は?
- ③ズバリ、来年1月の「SA」「FA」スリ身価格は?

画」では、業界新聞社3社様にご協力頂き、「スリ身通」として知られる各紙のスペシャリスト3名の方々に、気動向について、共通の3つの質問内容で伺ってみました。価格予想ようですが、是非、参



生産されたスリ身の大部分は下級品で、SA級、FA級の上級品は1割程度と極めて少ない。

脱米国産スリ身が加速し、Bシーズン価格は下げ予想

米国スケソウダラ・スリ身の4万トの日本への供給数量は、日本の全体のスリ身需要25万トからすると、15%程度でしかなく、以前の50%以上と比べると格段に小さくなっている。北海道の陸上スリ身は昨年7万5000トが生産され、国内消費されている。また、タイ、インドなど東南アジアのスリ身の供給で賄われている。大手スリ身ディーラーでは「昨年米国産スリ身価格の高騰で、各ねり製品メーカーでは、米国以外のスリ身をうまく使いこなす技術を高めた。この結果、米国産スリ身に依存しなくても製品を生産する体制を整えてしまった」としている。

いまだ高値在庫のスリ身抱え、ひっ迫感薄く

10月から12月に向けて年末年始おせち商品のシーズンとなることから、スケソウダラの上級スリ身の需要が高まり、少ない今年Bシーズンのスリ身だけでは賄えない。しかし、昨年の高値在庫を各ねり製品メーカーはいまだに抱えていることから、今年これらを小出しにしながら、年末年始のおせち商品づくりとなる。ちなみにスリ身の在庫は6月末で7万8000ト(うちスケソウ4万7000ト)となっている。

また、Bシーズンの価格交渉が行われているが、上級品でAシーズンと比べ5~10%程度値下げになるものと見られている(AシーズンはFA級でC&F490円、末端で550~600円)ことから年明けの価格帯は、SA:520~600円、FA:480~540円が予想される。下級品は品質見合で随時価格となっている。なお、ちなみにタイ・イトヨリスリ身はC&F2ドル70セントと安値となっており、現地は安値のスリ身での販売を嫌い、自社製品化する動きが加速している。

その他、来年のスケソウダラの漁獲枠については、90万~100万トに増えるのではないかと予測されている。決定は12月上旬のRC(現地・地域漁業委員会)で示される。

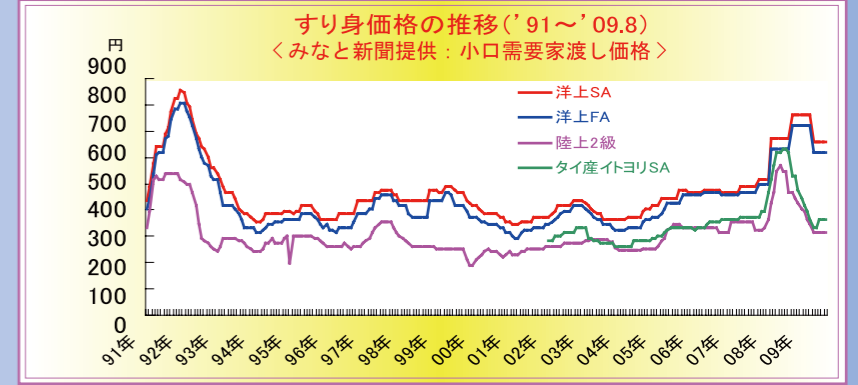


かまぼこ通信

編集長 小山一夫氏

需要回復なるか米国スケトウすり身

米国スケトウすり身相場は今年に入って一変した。来年の漁獲枠放出量が引続き低水準にとどまるとの見方が支配的となる中、それでも相場は坂を駆け落ちるように崩れた。Bシーズン操業は生産調整がさらに進み、9月中旬に終了、大幅なすり身減産が明らかとなった。しかし、B物の値決め・販売へと場面をすんなり移していけない。昨年までの高値反動、東南アジアすり身へのシフトが進んだためだ。米国側は落ち込んだ需要回復に向けた足がかりをつかむには、Aシーズンに引き続き厳しい決断を求められる場面もありそうだ。



縮小した米国すり身マーケット

わが国の冷凍すり身供給は1990年以降、米国スケトウすり身は常に供給の太宗を担ってきた。白身サカナ資源としては世界でも豊かで、しかも資源管理が徹底しており、わが国における主力すり身供給のポジションは将来にわたり不動のものと思われていた。ところが、米国側は世界における堅調なフィレ需要を背景に近年、利益・生産効率にも優れたフィレ生産に注力、一方のすり身生産を縮小した。その結果、漁獲枠削減も重なり、異常な高値が出現し、昨年11月ピークに達した。ユーザーの中には、供給の不安定さと共に、価格の乱高下を嫌って米国すり身を敬遠する動きも見受けられ、東南アジアすり身へのシフトが進んだ。ちなみに昨年2008年の米国スケトウすり身輸入量は7万ト。弊社発行のかまぼこ通信調べによると、2008年のすり身総輸入量は20万8千トであるから、米国スケトウの輸入シェアは34%。これに対し、かつて欧州向けフィレ生産が本格化する2000年までは年間ほぼ12~13万ト輸入されており、そのシェア率は全体の45~50%近くまであった。

大幅減産となったBシーズン

米国スケトウBシーズンのすり身生産量は4万ト程度にとどまった。前半のAシーズンを合わせても年間生産量は8万ト弱にすぎない。昨年の12万ト強に比べると3割の大幅な減産だ。その要因は、今年の漁獲枠が最悪の81万5千トまで落ち込んだこと、加えてフィレ生産に注力したため。かつて漁獲枠のおよそ半数がすり身に仕向けられていたが、今年は3割程度にすぎなかった。漁獲枠減少の中、すり身生産の調整が進む。これにより、価格下落の歯止めにプラスに働くことは確か。加えて、来年の漁獲枠は最悪となった今年の漁獲枠を上回るであろうが、90万ト、よくても100万トまで届くか、届かないかの水準、との見方が一般的。いずれにしても、12月に北太平洋漁業管理委員会から来年の漁獲枠が発表される。

来年1月のFA価格が550~600円予想

Bシーズンすり身生産の内容がすでに明らかになっているが、9月中旬時点でユーザー側はまだB物に目を向けるまでに至らず、早く売り切りたい米国をじらす。なにしろA物で相場を大きく下げているのだから。そのA物における成約価格は、A級と共にボリュームゾーンのKA級が昨年のB物に比べ最終的には200円強の大幅ダウン。これに対し、A級は100円から100円強のダウン。このため、A級とKA級の間でこれまで見たこともない150円程度の大きな格差が生じている。そして特注品と化している上級品FAは同じく100円強のダウン。

FA級は、高級な板蒲鉾、かに足などになくはならないグレードだが、使用するユーザーも極限られてきている中、「蓋を開けてみたら、これしかないの」という懸念も否定できない。1月年明けの価格は「ないもの高」からユーザー一渡しでズバリ、高値横ばいの550円から600円の間。